

平成20年10月17日

亜細亜大学アジア研究所所報

第132号

# 鹿島守之助のパン・アジア主義

平川 均

## 多彩な経歴の鹿島守之助

東アジア共同体に関する議論が、賛否を含んで盛んに行われている。こうして近代日本のアジア思想にも再び光が当てられるようになった。だが、戦前のアジア主義のなかにあってほとんど関心を呼ばなかった人物のひとりに鹿島守之助（一八九六―一九七五）がいる。彼は戦前・戦中・戦後を通じて鹿島建設の経営者であり、戦後は自民党の代議士（一九五三―七一年）であった。国際問題研究所の設立に関わり、自らも鹿島平和研究所を設立している。後者は自著を含め膨大な研究書を刊行している。また、六七―七五年まで鹿島平和賞を設けて七名の人物に賞を与えており、社会活動もきわめて活発であった。

しかし、彼が日英外交研究によって母校の東京大学から博士の学位を得ただけでなく、多くの書や時評を執筆した学者であることはあまり知られていない。彼がパン・アジア主義の書を著し、晩年には「わが最大の希願はいつの日に

かパンアジアの実現をみることである」と刻んだ碑を建立したことを知る者は、さらに少ない。きわめて多彩な彼の生き方は晩年の碑に刻んだ思いとどう関わっているだろうか。

ところで、彼が戦中、大政翼賛会調査局長を務めたこと、また鹿島組を経営したことは、彼に難題を突き付けている。特に、中国人の強制連行と彼らへの過酷な扱いが起こした花岡鉦山事件などへの経営責任問題は、彼の思想との関係で総合的な検討を要する。だが、とりあえずは彼のパン・アジア主義とはどのようなものであったかを考察することにした。

## 鹿島守之助・クーデンホーフ・パン・アジア

鹿島守之助（旧姓・永富）は、一八九六年に旧家永富家の四男として兵庫県揖保郡に生まれた。彼は養子縁組によって二七年に鹿島家に婿入りするが、一九二〇年代は、ドイツとイタリアの両大使館に勤務し、そこで出会ったクーデンホーフ・カレルギーの思想に強い影響を受けて、パン・ヨーロッパに関心を抱いた。こうし

て彼自身も二六（大正一五）年『汎亜細亜運動と欧羅巴運動』を著し、パン・アジア主義を世に問うた。この思想形成の経緯は、当時の他のアジア主義者とは大きく異なるものである。

鹿島のパン・アジア主義への道は当時の世界史の流れへの解釈と自己の存在意義との接点において生まれたものである。高校時代を京都の三高で過ごした彼は、大正デモクラシーの真つただ中で急速に広がる唯物主義と民主主義のどちらにも満足できず、この「思想上の無政府状態」は外交官となりドイツに赴任するまで続いた。しかし、二二年のドイツ赴任後間もなく、彼はパン・ヨーロッパ運動に身を投じる。クーデンホーフ・カレルギーに出会い、自らはパン・アジアの運動を起こそうと決意するのである。では、クーデンホーフから彼は何を学んだのか。

クーデンホーフは、以下の三つの課題の解決策がパン・ヨーロッパだと主張する。すなわち、（一）科学技術の発達で戦争を悲惨なものにする、（二）ロシアの脅威がある、（三）分裂したヨーロッパはアメリカとの経済戦争に敗れるにちがいない。彼の思想がヨーロッパで受け入れられていく現場に立ち会って、また彼の勧めもあって、鹿島はパン・アジア運動を組織しようとする。

だが、何故彼がこの運動を担わねばならないのか。クーデンホーフの『実践的理想主義』がそれに答える。彼は「貴族」論を著し、そこで貴族とは「肉体的、精神的、知的な美を基本」

とし、「同時代の人々より傑出している者」である。同時に、ヨーロッパが今求めるのは戦争を回避する実践的平和主義者だとする。その平和主義者こそ貴族である。鹿島はこの貴族論に自らの役割を重ねたのである。彼はクーデンホッフの主張を受け入れた論稿を一九二五年一月の東京日々新聞に「新貴族論」として投稿している。その四年後の二九年末に彼は外務省を退官し、翌年二月の衆議院第一七回総選挙に立候補するのである。彼は政治家として日本社会を彼の信じる道に導こうとした。その思想が、いうまでもなくパン・アジアであった。

### 鹿島のパン・アジア論

第一次大戦後の世界を鹿島は、五つの大きな連盟・超国家体制になると見通した。一九一七年に誕生したソビエト連邦、パン・アメリカ、イギリス連邦、形成しつつあるパン・ヨーロッパなどによって形成される世界秩序である。アジアも超国家体制に向わねばならない。

アジアには、「二つの覚醒運動」がある。一つは「独立自由を得た運動」、もう一つは「解放を得むとする諸民族の独立運動」である。幼弱な日本が後者の道を選ぶのは英仏等との戦争となり、「あまりに非政治的」である。何より戦争は回避しなければならない。そのために日本は中国とまず連盟すべきである。よって日清戦争後中国大陸に権益を伸ばす日本は、日中連盟のため侵略を止め、「大々的親政策を講ずるより他に方法はない」と主張した。

### 大東亜共栄圏とパン・アジア主義

しかし、日本が侵略の道を進むと、結局彼は大東亜の道に合流していく。不安を抱えつつもファシズムに歴史進歩の可能性を見出し、日独伊の同盟を支持し、中国侵略を正当化していくのである。一九四二―四三年には大政翼賛会調査局長に就く。

彼は開戦後の一時期のみ日本の勝利を信じたが、ほぼ常に敗戦の可能性を冷静に受け入れていたように見える。むしろ敗戦が共産主義への危機である点に注目していた。その理由は彼が資本家である点もあるにしても、同時に国際関係に対するその世界認識にある。彼は国際政治学における近代国家体系の下での平和秩序を理想としており、共産主義がこの体系と鋭く対立する点において反共主義者であったということができるだろう。それは戦後の彼の主張において確認できる。いずれにせよ、彼は敗戦の結果、一九四六年一月―五一年八月まで公職追放と言論バージの指定を受けるのである。

### 戦後のアジア太平洋共同体とパン・アジア論

鹿島は公職追放が解除されると、一九五三年四月の第三回参議院選挙に自由党から立候補し当選し、その後北海道開発長官などを務める。六五年には自ら『国際時報』を創刊し、国際時事問題に関する論評を始める。そして、六六年にはアジア太平洋共同体を提唱する。

パン・アジアからアジア太平洋共同体への変

更は、中国が平和共存を拒否する侵略主義・膨張主義の国だからだという。鹿島によれば五年の日米安保条約は核を持たない日本が五〇年の中ソ友好同盟相互援助条約への防衛措置であつて、中ソが同盟を破棄し、平和共存路線に移行すれば、日米安保も再考の余地が生まれるものであつた。何よりも平和秩序は勢力均衡原則の下で初めて確保されるというのである。

彼は、一九七三年夏に再びパン・アジアの結成に主張を戻した。理由は、遅れはしたがソ連と同様の平和共存路線に中国が復帰したからであつた。それを契機に彼はパン・アジアの夢に立ち戻つたのである。

彼のアジア主義は近代国家体系の下でのヨーロッパの経験をもとにアジア共同体への夢を實現しようというものであつた。戦後のヨーロッパ共同体の實現を背景に、再びアジアに同じ夢を追おうとした。そのための社会活動が研究所の設立や外交研究の出版活動などであつた、と理解することができる。彼の評価は戦時中の彼と彼の企業の活動によって検討すべき点が多々あるが、彼のパン・アジア主義は世界的な趨勢を見通すことによって生み出されたものである。この点で依然、今日世界の基本を形作る。改めて検討する余地のある主張のように思われる。

詳しくは、拙稿「鹿島守之助とパン・アジア主義」『経済科学』（名大）第五五巻第四号（二〇〇八年三月）を参照されたい。  
（ひらかわひとし・名古屋大学大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター教授）